

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2025. 8



令和7年8月1日発行(毎月1回1日発行)第73巻第8号

No.807

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二五年 八月号 (通巻八〇七号)

◇今月の二十首詠……原郷 石田明彦 2

■作品 [A] 梅本武義・奥田陽子他 4

A 石澤利夫他 18

B 天野純代他 42

C 岩野美代子他 54

A 杉山睦子他 66

■オリーブ集 定金崇恵・佐藤光正他 32

◇今月の二人 米原千秋・かわひがしかずよ 14

私と短歌との出会い (276) 潮田千代 17

■〈第一歌集を読む〉 29 菅野輝子 28

小宮山玉江歌集『冬の林檎』

― 農に生きる ―

■第71回地中海全国大会 (大津大会) 報告 田土成彦・牧雄彦 38

(写真・藤岡美幸)

小野茂樹の言葉を拾う (1)

■遊覧寄港 (中村天風の本に巡り合い) 筆谷幸子 30

■歌壇月旦 榎垣美保子 31

言葉の芸術

報告・佐久間晨師を偲ぶ会 上林節江 77

■六月号作品批評 58

A …… 福田庸子・仲西正子

阿藤たつる・田中純子

B …… 小原香里・潮田千代

C …… 泉嘉穂子

オリーブ集 …… もとむらしげと

十首選 岩月宏彦・辰巳洋子 53

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

最近の歌誌より (編集部) 76

クリップ …… 表3 神田通信 …… 表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

原 郷

石田 明彦

一九四七年広島市近郊の旧安村^{やすむら}生まれ
二〇一一年「地中海」入社
岡山支社所属
歌集に『ロードノイズ』がある

荷馬車にてヒロシマの町へ越し行けり四歳の記憶はただ白き道

「みな来い」と餓鬼大将に集められジープに叫ぶ「チョコレート！」幾度も
撒かれたるバターボールは親に言わずアメリカの味を初めて知りぬ

女湯でケロイドの腕に抱かれたり 原爆で子を亡くししひとか

アパートに売血で暮らす男いて奇声あげしがじきに死にたり

あそこにはアメリカあると小学生のわれは焦がれきクオンセット・ハット

教材の広島俯瞰図に大書して描かれていし比治山ABC

割り箸とザラ紙で作りし日の丸をネール首相の歓迎に振りたり

日の丸の小旗作らせし老教師いかに思いき戦争の時代を

下校時に給食のパンを届けゆく欠席の子のバラックの家

背中見す吉川清に顔しかむ引き揚げ者にて兵たりし父は

わがためとドーム模型を母は買う吉川清の土産物店に

逃避行を母は子らへと語り継ぐ「ダワイ」と胸に突きつける銃

中学の被爆教師は朝礼にコルホーズの夢語りやめざり

ライフ誌の写真を見んと自転車で通うアメリカ文化センター

外人はやさし日本人スタッフが日本の子叱るアメリカ文化センター

石油あと二十年ですを信じたり東海に原子の火ともるころに

失対の飯場にありし炊事場で働く少女を見つめいしこと

われはまだ子供図書館の中におり核のボタンに手の置かれし刻

帰らぬかもしれぬと姉は渡米せりそれよりアメリカを憎み始めぬ

作品 A

梅本武義

もう少し待て

・羊

新緑の輝く一日卒寿越す老人に負けじとグラウンドゴルフ
わが植えて五十年過ぎる桜桃樹を頭上にしばし味わう
竹の子に罪無きことをふと思う枯木の炎に滾る湯見つ
昨年よりも寝えおるを氣付かれず売り出されるや苗買いし妻
親友三人逝きて待ち居る八十二歳麻雀の席もう少し待て
安倍批判なくて安倍派の批判のみしつくりゆかぬ思いの続く
また無知な大臣あらわれ更迭に弱小政權基盤が揺れる

奥田陽子

夜が来る

・羊

床の上に倒れんばかりに泣くわれを抱え入れたり人無き部屋へ
時かけて慰めくる看護師の言葉解さねどただ暖かし
うつむきて居たりし吾か声勵まし夫の言いたりへまた死なないよ
家に帰らん希みいだきてある夫の一日の暮のカーテンを閉ず
へまた夜が来る」と子の言う夜を越えて再び会々と定まらざれば
夜半醒めてわが名を呼びていたりしと幾度か報告に聞くべくなりぬ
ふたり在るを羨しと言ひし人なりき夫病むをしずかに聞きてくれにし

大浪美雪

花疲れ

・森

雪のこる山より抜けしか白き鳥会津平を悠々とゆく
名にし負ふ安達太良山を間近にすああ智恵子の山とふりあふきたり
スーパ―に米のなき今みちのくの田に水引かれ光返せり
萌えいつる草の芽ひたし雪消水小さくも流れに勢ひのあり
しばし吾と見つめ合ひたる雌の雉子音も立てずに林の奥へ
頭上より降り来し声は三光鳥つきひほしほいと渡る
花桃の紅強き並木道花疲れといふことは浮かびぬ

磯田ひさ子

山へ行く

・森

痛む歯にレーザー光線カチカチと当つれば肉の焼くる匂ひす
治療後に漱げば水はくろぐろと確かに歯肉焦げたる証し
歯を削るビーム機バタバタとぎれつつ素朴なる音たたらのごとし
手も足も技術のひとつ片足にビーム機あやつり歯科医は削る
還暦を過ぎて歯のある身を恥ぢて姥捨山へ行きたる話
みづからの命ちぢめむと山へ行く棄老伝説今も埋もる
長生きは死活問題近き世に貧しさゆゑの悲話限りなし

市原やよひ

マージャン

・萬

マージャンのサークル楽しと初めての帰省に孫の氣負いて話す
たちまちに蘇り来る遠き日の炬燵囲みし家族マージャン
手解きは夫の役割真剣に授業受けてた我と二人の子と
ガラガラと大きな音たて休日が知らぬ間に終われど笑顔の四人
マージャンバイありしと孫に見せおれば底より出でし成績表が
休日を埋めて綴らるる夫の文字楽しき記録よ家族マージャン
「おばあちゃん今度一緒にね」帰りに孫ただにっこりと

神田鈴子

大会

・大

大会はひととせ振りの再会ぞなつかしき顔にまみゆる大津
大会につね集ひたるいくたりか姿の見えぬ人をさびしむ
雨の予報にたがひて朝はおだやかな光が琵琶湖を明るく照らす
待ち待ちし曾孫の写真が送られ来、指をしやぶれる小さき命
はればれと母になりたる孫娘しかと子を抱く腕のたくまし
とれとれの新玉ねぎが届きたり淡路島より友のこころも
玉ねぎの輪切りにバター、めんつゆをかけて焼く味舌に溶けゆく

上林節江

五月晴れ

・濟

残雪も早蕨の野のかがやきも暮れずにあれよ娘が笑みている
仙台東東口まで送迎車あるはラッキーいざ温泉へ
夕食のフレンチという華やきにひたつていよう娘一家と
全身で心を伝えし無邪気さはもう卒業か思春期の孫
丁寧な物言いをされし寂しさよ私はどんな祖母なのだろう
四日間で一年分の幸せがほかほか流れ五月晴れなり
孫たちが一人前になる姿見たし生きたしはげむ五千歩

菊地栄子

鄙の道

・海

またたける星座が着地したような土手にみどりの路のとう萌ゆ
風なくば微動だにせぬ山裾の朝明けしはし樹木に対す
近寄りて写したきもの幹太く天を指しいる疎林の上枝
「晴れ女」逃したるらし見渡しの池につきつぎ波紋を立つる
小鳥らの翼のようにふくらまめ四月はかたき石楠花のはな
路傍にも墓石建である鄙の道我は知りたきいにしえ人を
毛越寺の池の巖も老いにけり六年生の遠足通か

河野繁子

八月の記憶

・雁

ピカドーンに会いは国民学校六年生校舎の下にもぐりしあの日
原爆の落ちた日の夕ほそき道すすけた人ら山越えゆきし
焼け野原歩いておれば一本の楠木くすほる広島の街
疎開児の我は故郷をもたざりし終の棲家に山野草育つ
違反などしてはおらぬに警察の車に止められ何事なりし
「どこへ行く」「散歩です」我が杖に光センサー貼られて別る
徘徊の蝸と見ゆるを露知らず鏡に自分の姿をうつす

小林能子

まくら辺に

・羊

賜りし「短歌カレンダー」まくら辺に夏日ののちの梅雨を迎へぬ
習志野に日々をいとほしむ賀寿かさね世界に平和あれと祈る人
浅草に商家を守り来し友の戦ひ収めし人への讃歌
たしかなる雷のさくら詠むひとよ 出合ひ懐かしき軽井沢大会
まつすぐに佐久間屋の「山毛櫨」は葉末を高き空に揺げる
晩年の友が師匠と慕ひたる藤島秀慈は「脚のつれ」詠む
もういやだ、いやだと思ふ雨の日の暮れてとつておき一粒のチョコ

近藤 栄 昭

教育勸語

・虹

坂 出 裕 子

花水木

・洛

博愛の衆におよばぬ選挙あり人優しいと旅行者いうに
よみがえることを望まぬこともある猶の九生^{ゴウセイ}コロナの九波
遮られ行き先変える方違え運命論者に今日は添いいる
指の先指揮棒ふるわせ発信し眉で伝える音感の世界
田の水の豊かさ水の濃くなりて年を重ねて米の美味さよ
怒りたい相手は人と探している誰でもいいさ寂しい話
何か変お菓手帳がデジタル化患者を使いしわと寄せる

近藤 芳 仙

記憶断片

・信

佐藤 道 子

異変

・甲

この年も巡る卯月に母の忌の記憶が甦る 昭和の母の
葬送へ準備怠りなき母の 思ひ返せば苦しき昭和
征きしまま帰らぬ父に代はる母 乳呑み児育て病む姑^{ハハ}看取り
夜明け待ち野良に働く母なりき 乳呑み児吾にかまふひまなく
満州^{マンシュウ}より引き揚げし男性家に迎へその両親も看取りせし母
妹のあるが嬉しくをりふしに亡母の想ひをなぞる此の頃
大戦後八十年とふこの年に生きて世を見る豊かなる世を

坂 上 直 美

芸術

・天

柴田 登志恵

風

・天

若き日にサモトラケのニケを見き今なお我は翔ぶ夢を見る
好きな画家? シヴァンヌ・モロー・フリードリッヒ・セガンティニに若き日のピカソ
好きな画家? 柳原紫峰・速水御舟・菊池契月・上村松園
どこまでも遠くに続く歌の道足弱々々ととどまらず行く
はるかなる頂遠し歌の山その山裾に葦草摘む
今日一つ明日また一つ歌を詠む作らんとしても作れぬ日まで
春過ぎて若葉さやげる夏の山その脚きをとどめんと詠む

友からの葉書机上に置きしまま桜の花の季節過ぎゆき
川べりの桜並木を友と来て語り合ひつつ歩みたかりしを
マスクする人さへもなく外つ国の人^{コロナ}の街を歩むと
二二一、二礼二拍手一礼と孫に教へて毘沙門詣つ
よき御縁ありますやうに折らむといつも財布に五円玉入れ
いつも買ふ売り場にお米なき日日を子が氣遣ひて持ちくるるなり
花水木はなびら日毎ひろひたる梢に揺るる小さなる実の

四月の花壇クリスマスローズ、ラベンダー^{ラベンダー}季を違へて一斉に咲く
植物は地球の終りと思ふらし一斉に咲き実を数多付く
愛らしきタンポポならずタンポポと言ひたき程に高々育つ
六月を待たずに藤の花終る牡丹は四月に散り果てて居り
どの家の薔薇も四月に花盛り葉の見えぬ程押し合ひて咲く
子供等に迷惑かけぬ事願ひ九十六歳毎朝歩く
朝の散歩にワンチャン^{ワンチャン}達と会ふことがたつた一つの楽しみとなる

カルデラの蒼空たかく三本の飛行機雲の浮かるるが見ゆ
とりどりに芽吹くみどりの山に入り銀色の龍吹き抜くる風
道松はあまたの叟^{ソウ}すまはせて龍^{リウ}いただきに降りたつを待つ
雷を浴び龍となるのぞみ持つ叟いきづく道松の陰
道松へ音なく叟消えゆきておほき息吐きまた歩み出づ
いますこしゆるゆる歩まばよかりしを山降り街のにきはひにをり
もどりに来し街は夕暮れ山深き簡鳥の声耳に残りぬ

鈴木結志

道行文

・福

表現の詩情に結ぶ道行文に思いをはせる今日の育み可能性は無限感こそ知恵の源泉小は大を制する教え脳活性はかる手習いひたすらに上寿につなぐ書の技を練る雨風に耐えつつようやく骨折りを傘をひろげる表現芸術表現の知己にみじかうた詠みて如実におのが心引き出す詠むうたの範疇などと思いつつみじかうたよみおのれを見つむ詩情性うたにはかりて身を正しおのれの域にみじかうた詠む

関根榮子

焼葱

・埴

健康を現すとう爪の色白星ありて良きこと願う

夜半覚めて浮かびくるのは何ゆえに若かりし日のことばかりにて

庭先の虫袋の攻防が紫色消えて白ばかりなり

バッグよりはみ出す長葱を折らぬよう抱えて帰る夕ぐれの道

幼日の思い出かえる焼葱を首に巻きたる風邪の療法

腰の怪我治りし兄と久々に庭のテーブルに話のつづく

値上げなど続く昨今そういえば戦後の混乱に少し似ており

関根和美

湖畔にて

・埴

ひさびさの琵琶の湖なり約したるあのひとかのひとここに在らざる
膳所ちかく湖畔の聖母の教会のミサにあずかるやにおくれて
車窓よりはやも見えたり背がわら南蛮寺はた天守にも似る
戦災をのがれ幾重のアーチなす白壁モザイクタイルのひかり
「永遠にのこるのは愛 愛です」と異国の神父のほほえみに会う
パイプこそなくもゆたかに奥深く木のオルガンの音に満たさる
ときめき坂もすこしのばれば義仲寺に思いのこして踵をかえす

高尾恭子

お手紙

・大

お手紙が時代遅れの風に散る白ヤギさんの春の独白
すれ違ふ言葉とどかず持てあます八十四円の切手のように
土壁の崩れに遅き春が来てボツンと一軒お手紙を待つ
山を越え届くお手紙ぼつてりと青きインクの言の葉おどる
風雪に耐えた記憶よ押し花の桜ほのかに紅とどめたり
しのぶ恋、片恋、初恋、恨む恋 詠み人しらずの墨字の掠れ
千年ののちに記憶を積みあげよバーリースのICメモリ

高津砂千子

御箱

・零

サクサクとカットする音こちよく美容院にてまなこつむりぬ

母も姉も八十路の坂を越えられず逝きしを思う水無月はじめ

急坂を上るは難しまわり道してゆうるりと歩みゆくなり

つつがなき息子夫婦とともに住みこころ強きよ何はなくとも

みどり葉の枝伸ばしゆくもみじの木朝あさながむわがものとして

とりつけし御箱に小鳥今日は来ず暮れてゆきたり雨の一日

ともかくもひと日終わりて茶を飲めばほっとするなり夜のしじまに

滝田靖子

郭公

・新

家家のアンテナを飛び移りながら五月の朝を郭公が鳴く
郭公の飛び移り行くアンテナは町なかに茂る金風の枝
乗り換へは八分ですと爽やかに駅員が言ふ切符渡しつつ
頑張りますなどと答へてしまつてる乗り換へは八分ですと言はれて
日曜の朝イチのバスの乗客は旅の荷物を持った八人
半袖のTシャツの人長袖のセーターの人東京駅の混沌
旅先に読むはずの谷川俊太郎さはりもせず旅を終へたり

田土成彦

大会

・宙

中島央子

八十年

・森

大津大会当然のごと合唱は「琵琶湖周航の歌」にはじまる
 「戦友」を宴なかばに歌ひ出づ香川山本古希過ぎてなほ
 定番の「青い山脈」宗一の美声響かせる宴終章
 ひと夜明け昨夜にうかびし歌一首あはくはかなく思ひ出せない
 帰路は徒歩ふと立ち寄りし産土の手水の水の少し冷たい
 うづくまる胎児の形にねむるとき劫初の闇の限りもあらず
 食細くなり食パンの五枚切り久しく買はず大盛りなども

田土才恵

イヤリング

・宙

永田進一

京洛道通

・山

振り返るわが来し方の分岐点色鮮やかに八十路越え来て
 臘梅の期待の若芽剪られたり咲くこともなく冬やり過ぐす
 いつの日も終わりはあるもの機嫌良くなりあがとうと言える明日のあらん
 生涯の記憶となれる出来事を五月の空にとどめておかな
 人の輪の望みのほかの温かさ生れて広かれこの湖に
 竿売りが竿や竿竹と声流し路地ゆく昼のひとりのあわい
 耳元に片割れリング揺らしつつ華やき小ささを道連れにゆく

玉井綾子

花々

・羊

永塚節子

葛の葉

・銀

雨に泣き暗れも辛いと言う母は散る花々を涙みて過ぐ
 涙沁む土壌なるらん母の住む地のブラシノキ葉がかる
 アレンジメントに水やりをする母に介護職員は敬語で話す
 オアシスに水含ませる毎朝の母に応えて花咲き続く
 何をしてきたと七首突きつける黄昏時のカシワバアジサイ
 生きられる場所に黙って咲く薔薇の千葉から朝霞に移せば枯れる
 自転車のチャイルドシートに座る子の帽子をボスと思う金糸梅

「異常なし」検査結果を告げくるる青年医師の黒縁眼鏡
 病院を出でて現状七号彩れる紅のつつじ眼に充つる
 そよそり銀杏若葉の街路樹が五月の風に勢ひを増す
 出産の予定日の遅れ氣にしつつ曾孫生れたり四千グラム
 五月晴れま白く咲きたる山法師見上げて暫し歩みを止む
 毎朝のテレビ体操の深呼吸両手ひろげて何も思はず
 遠見ゆる残雪ひかる富士山頂極めしは遙か八十年経つ

西寺趾辿れば響く鐘の音の小学校に自転車止まる
 羅城門遺跡訪ねて友と来る五月晴れなり杜仲の繁る
 提灯の二つ吊るさる東寺には白鷺護る門前清し
 講堂のすらりと高き御仏の御目のあたり涼やかに見ゆ
 藍染めのネクタイ小物も売られおり商魂逞し仏像の裏に
 梅小路板の下でビール飲む列車の往来通かな旅路
 二日目の全国大会果てしのち京洛巡り余韻楽しむ

花終えしシンビジュウムをもらい受けいそいそ帰る春の日温し
 山椒の若葉うれしや小さな黒きいもむしひたすらに食む
 昨日見しいもむし今日はみどり色山椒色に染まりていたり
 山椒の若葉二三枚頂きめわれも明日はザムザとなるや
 今にして見つけ出したる喜びを友は笑うなせあの時に
 今さらと思うかたわら急ぐ足残り時間の量を計りて
 葛の葉のざわざわと風にゆれ伸びに伸びたり梅雨入りまぢか

仲西 正子

火を囲む

・沖

見上げれば万寿果ひろく葉の影にわたる島かぜ命はぐくむ
走り根のひとつ折れたる万寿果のおれしまに花も実もあり
万寿果の育む命をいただかな青き実きれば乳のしたたる
おおらかに肉と野菜を切りおきて火を熾し焼く男の熱り
火を囲み庭に肉焼く男らは小さき者もきびきびとして
火を囲み肉の焼くるを待ちおれば火熾しに泣きし昭和をおもう
涙して窓に火熾し梅雨湿り薄の枯れ葉に鶴丸マツチ

中村 博子

天津大会

・澁

天津駅に風早さんと待ち合わせ全国大会へ次女に送らる
三十年まえに両親伴いて天津プリンスに幾たびランチす
世話役は大阪の歌友懐かしき友らの笑顔に和むひと時
十五階の部屋の窓越しにび色の湖面見晴らす風早さんと
くらくらとしつつの班別歌会や磯田さんから貴重なお話
大会を終えてのホテル玄関へ草津から娘は車に待ちくれ
自宅からホテルへ送迎されながら疲れ果てたり横たわる日々

西堤 啓子

雨雲レーダー

・天

あの子の三十代も知らぬまま 海の向こうのパラレルワールド
血流の止まらぬような地下道の雑踏をぬけ出口3A—c
つかまえてもまたもこぼれる時の粒 流沙に風は吹きぬけてゆく
火の山の吐息しじら緑濃き裾ひく女神 ときに怒れり
それぞれの想像力に知る知らぬワルシャワ・ヒロシマ・フクシマはあり
ただ一羽残れるカモにカムチャツカは遠く黄砂の空に目を閉ず
雨雲レーダーの画像に追われ東へと急ぐ春への藤の花ふさ

浜谷 久子

春耕

・地

そこかしこ出でくる蚯蚓土浅く小鍬を使う生息境界
地温上がる「蚯蚓出」のあとといく日眠るいのちを起す春耕
陽にさらされ匍匐前進蛇行する蚯蚓に柔らかな畑土かける
新生の薄黄緑の紋白蝶乾かぬ羽は葉かげを動かす
双葉かざし芽を出す胡瓜に遅れじと苦瓜オクラの渾身のとき
小判草鳥野豌豆実る土手赤詰草の玉房広がる
四秒の停留のち走り行く朝刊バイクの午前二時半

檜垣 美保子

飛燕

・昂

すがたなくつばめのひなの競うごと鳴く声きこゆ川はたの道
セメントの袋積み上げられさらに天井高き倉庫に飛燕
虫よけの疑似オニヤンマ軒先に吊るせばみどりの硝子の目ギロリ
「エトピリカ」のメロディーがふと口をつき夕暮れの橋渡りて帰る
まっ黒な川鶴が水の間に消えしばらく見えす水破る音
乳色のユッカの花が雨にぬれいまだ冷やされつつける原子炉
ねむるため努力するそんな夜もある救急車の音近づきて過ぐ

福田 庸子

棚田の道

・今

残雪の山より屈く北風に向き合ひ歩く棚田の道を
叢におほはれしまま年経たる土のかたちは棚田でありし
集合と解散の間の半日に色深めたり樹樹の新芽は
寂しさを伝へぬままに逝きし母をたどる日々あり我が衰へに
ハルジオン・カナダアネモネ菜園を陣取りゆきぬ外来種達
音声をとらへて文字化するA—に文字書かぬ世と文字書けぬ世に
メールでは伝はらぬものの字の癖も行間の呼吸もその人のもの

藤田美智子

かくれんぼ

・新

花の名を教へる役目の替はりたり君はスマホを味方につけて
村祭りの行列を呼び寄せくることし少女の奏でるピッコロの音は
くちびるに人差し指をあてながら見つけらるるを待つかくれんぼ
隠れしまま見つけてもらへぬ幼子はゐないか もうすぐ夕暮れとなる
「夜明けの頃が一番寂しい」つぶやきて少女はスケッチブックを開く
「美智子さん」と呼びくるる児らと過こしつつ我は優しき婆さんとなる
「嫌なことはやらない」と言ふ戸田奈津子一度は言ひたい台詞だけれど

藤森巳行

生きなむ

・銀

元号が平成令和と変はれども俺は今でも昭和を生きている
我が生命燃やして今日を生き抜きぬまだ見ぬ明日へつなぐ嬉しさ
歳とると掃除もたいへん我と妻I・L・D・Kにをさまりてゐる
歌詠める明日の自分に期待して名歌を残し死なむと思ふ
命削り作つた歌など皆無なり生きた証に我が歌生まれる
根源の生老病死の苦しみを越えて生きなむ法華経の知恵
辛き世を生き抜く力は勇氣なり心に勇氣の太陽を持て

本元由美子

嫁ぐ朝

・岡

嫁ぐ朝ひとすちの涙見せにけり明治生まれの武骨な父が
五月風のあやなす薔薇のあがにはに私はなにか色即是空
むらなかの薔薇の花咲く古家に煎じ薬の怪しき匂ひ
十葉を干して煎じて茶を淹れる魔法使ひの部屋のテーブル
どくだみのしるく匂へる庭隅にほたるぶくろの俯きて咲く
早苗田の逆山を揺らす青あらし友を訪なふローカル線に
木漏れ日の射し込む杜にかしはでの玉響ひびく鎮もりのなか

牧雄彦

ナイトバザール

・大

久々に訪ふラオスに敷かれし鉄道は一帯一路の一翼担ふや
鉄道が幸せを運びくるのかと問はむ思ひの消ゆることなし
乾季の村鶏の群たどと小さく砂煙あげつつ走る

山映のかかる寂しき地に生れてひとと生を過ぐし死にしもありけむ
さあ今宵も稼がむとテント張るをみなナイトバザールは活気づきたり
日が暮れて電灯点ればバザールにはかに人の賑はひにけり
立ち並ぶ露店に客を呼びとめて売りあるをみな声たたくまじき

松本多摩子

乗り換え

・桜

人混みを掻き分け急ぐ乗り換えは奇跡の六分歌友と走る
大会を終えたる朝の心境は知ったうれしさ知らぬさみしさ
常日頃歌会を持たず過ぎてゆく自信のなさを曝しておりぬ
コロナあり十年ぶりの同級生生き方さまざま吾に若いと
草を取る吾に付きくる立夏の夜ブーンと耳元蚊は寢室に
母の日は娘よりの万博プレゼント体調ととのえ楽しみに待つ
老いの坂未知の世界に歩を進めまだまだ見たしこの世の景色

三浦好博

安保とは

・鈍

沖縄の米軍による事件事故死者千百人安保とはこれ
トランプの対中覇権「ニッポンはその防人の任にて励め」
米ファースト、カナダの前にニッポンを五十一番目の州にするぞえ
しみじみと乖離を思ひ声に出し吟ずる「不思議なクニの憲法」
隊員の戦死戦傷に葬祭業輸血戦略既に動きたり
人類が滅亡しても水惑星終はりではない恐竜の例
嗚呼皆て黄金の波よ「あつちの米は安い、こつちの米は安い」

三木 まり 静

・昂

北向きの窓を開けば風は無く迷い仔猫が鳴く声かすかいつ頃から迷い続けているのだろう手足は細く毛色はくすみ声をかけ手招きしてもただ怯え迷い仔猫は草叢ふかく雨あがり草叢の陰にうずくまり動かなくなった仔猫の骸柔らかな畑の土を深く掘り迷い仔猫の骸を寝かせ柔らかな黒い土を被せゆく迷い仔猫よ静かに眠れ濃密な樹木の匂い水無月の夜が明けるまえ小径を行けば

宮本 靖彦

古家訪ねて

・凌

四十代十年住みしこの家に勤務充実子の育ちありき我建てし大和ハウスも住む人の手入れの良きかあまり変らずランニング始めしは阪急車庫あたり卒寿の今の健康の素吾に付き走りし娘高校のマラソン女子に優勝飾る

線路北は雲雀丘の豪邸区足をのぼしぬ夢追ひかけて記憶よりいくらか狭き最明寺川クロの水浴び群螢おぼろ旧友の標札などのいくつかは変らず残り名残りの尽きず

三好 聖三

棄てる

・伊

猫たちが甚振るところあおむけに守宮は四肢をあげて動かず死んだふりしていたものかベランダへほうればまなくたちあがりたり肩ならべ雨を見ているカビバラの背中にはつか哀愁のある鮫皮の軍靴は水を良く通すとの記述ありたり小説のなか猫たちに甚振られたるカナヘビの切れたる尻尾がしばらくあがく喰い終えて野良がゆっくり帰る行くと足跡を庇いながらに眼のあかぬうちに子猫は棄てにゆく岬のさきの青き海原

御代田 澄江

黄花輝く

・茨

新緑に本草の萌ゆる庭中に待ちしミモザの黄花輝く清明の名に負ひ暗るる朝まだき古紙回収に出す暖かきかな吾が胸の呼吸音鳴るヒューヒューと心不全薬服し落ち着く「深呼吸三回してから血圧を」亡き友の言ひ耳に響けり「千葉方面電巻注意」とラジオ深夜便聴けば夜中も妹思ふフランススコ教皇追悼ミサに別れ惜しむ幾万の人々祈る景はも核廃絶訴へ続けし教皇に感謝のミサをと胎内被爆者

もとむらしげと

古書店

・そ

講義聞く時を借しみて籠もりつつ本を読みいし学生の日々バイト代本に注ぎ込み卵ご飯つづきて栄養不良の発疹三千円財布に入れて棚を巡りメモを取りつつ買う本選ぶふところゆとりがなく数冊を選ぶたのしさ半日過ぐ古書店の棚に見つけし「三国志演義」に換えむと五冊持ち込む無愛想な店主がつけし五冊の値ほしき一冊とおなじ額なり持ち込みし五冊と一冊の交換をいえば店主がにやりと笑う

桃原 佳子

孫歌

・沖

朝の日はあまねく大地を照らすとき雲雀の声また鶯の声去年の秋夜香木の枝なべて切りにし後の新芽吹き出づ里に住み畑の草取り種を播き菜摘み季節早足で来るスーパリーの棚より消ゆるパンや麺高騰はいつまで続く河川敷にあざみの花のゆらゆらと緑川の水に育ちて五月孫歌は避けよと聞くに今日もまた籠もり居し孫案じては詠むこの本をどこかで友も読んでゐる真夜中の我も一人ではない

山下雅子

ペン牝豚

・習

三十年続きし夫の口述筆記鉛筆持てば思い出す手よ
 酷使せし口述筆記のわれの手がむかしむかしを語り出すなり
 ペン牝豚のあとは消ゆるもひびきよき夫の声聞く鉛筆にぎる
 肥後守といわれしナイフに削りしは三菱鉛筆ハイユニなりし
 のどかなる爆音ひびき一機ゆくつゆの晴れ間のひとときの辛
 日傘さす若きカップルつば広き朝もかぶりて町角に消ゆ
 ゆらゆらとお一人様われやり残しを抱きて眠るこの空しさよ

山野幸司

動物園

・沖

うるわしきカラーのクジャクおすましに付いて我らも大地を歩く
 森の中小道の続く動物園絵本のページ歩いて回る
 「君は幸せかね」と問われる猿舎のサルに尋ねられたり
 目の前の動物達の声聞かばはるかに遠き大陸想う
 星空のまたたく下に静もれる動物園の薄くないよ
 空高くキリンのはだえツヤツヤと黄は皇帝の気品にあふる
 動物園最後の倉屋高台に桑の実食みしレッサーパンダ

山本

孟

藤色の空

・大

こぼれ落つる豌豆一つ体折り搜して拾ふ節々痛し
 去年会ひし親友の子より喪中来るいよいよ孤りこの世に居ます
 孫の行くフランスの向かう陽の没む藤色の空に蝙蝠の舞ふ
 雀らは人近づくと身を隠す背もみちの中さへつりやめず
 戦ひは敗れし方が申し出る正邪で決まるものではあらず
 イスラエル、アウシュビッツの報復か ガザ地区の人の殲滅策す
 逆転勝ち甲子園球場四万の笑顔と喚声うつはは滾る

養学登志子

べたと生きしか

・凌

パンジーをアイボリーから濃紫グラデーションに鉢並べむか
 花びらのうす紫に穴点だれが喰ったかその正体よ
 夕されば割箸を持てパンジーの根方しらべる こいつが喰った
 縮まりて十ミリ程の蛸たこ蛸たこつまみてポイッと遠くへ抛る
 生れ出で幾日もせぬなくじり宙飛ぶという体験なせる
 高階より遠く放られし蛸蛸脳震盪死かべたと生きしか
 公園には草木充分はらからとめぐりあいたるものもいるやも

横田敏子

アマリス

・福

半年を閉め切りし家に置かれたるアマリス咲きぬいつものように
 船り来て水やり陽に当て追肥せし十五の球根みごとに開く
 勤めいし頃より咲き継ぐアマリスこの先いつ迄咲きくれるやら
 六月のクリスマスローズまだ元氣花びらカラカラ造花のように
 梅雨前のさ庭一面草茫々シルバーセンターの草むしりはまだ
 草も木も日毎に伸びゆくその命その勢いの羨ましきまで
 時折に届くメールの花だよりひと日の疲れ解かれてゆく

久我田鶴子

大津にて

・羊

教え子がいまや親友ライブにもいつしよに行くとかがやく顔は
 びかびかの肌のかがやき かなしみを越えゆく術をひとは手にして
 遣されしかなしみの歌つづけるを会へばよるこびの近況報告
 伝へきるまでは放さぬといふことくあふるるものをぶつけてきたる
 みちがへるほど若返りたるひとぞ 良かつた元氣にまだ生きられる
 ふたたびを会ひたるひとの馴染みて人の動きに合はせ働く
 母の死後を歌につながり笑ふひと縁といふをゆるやかに得て